

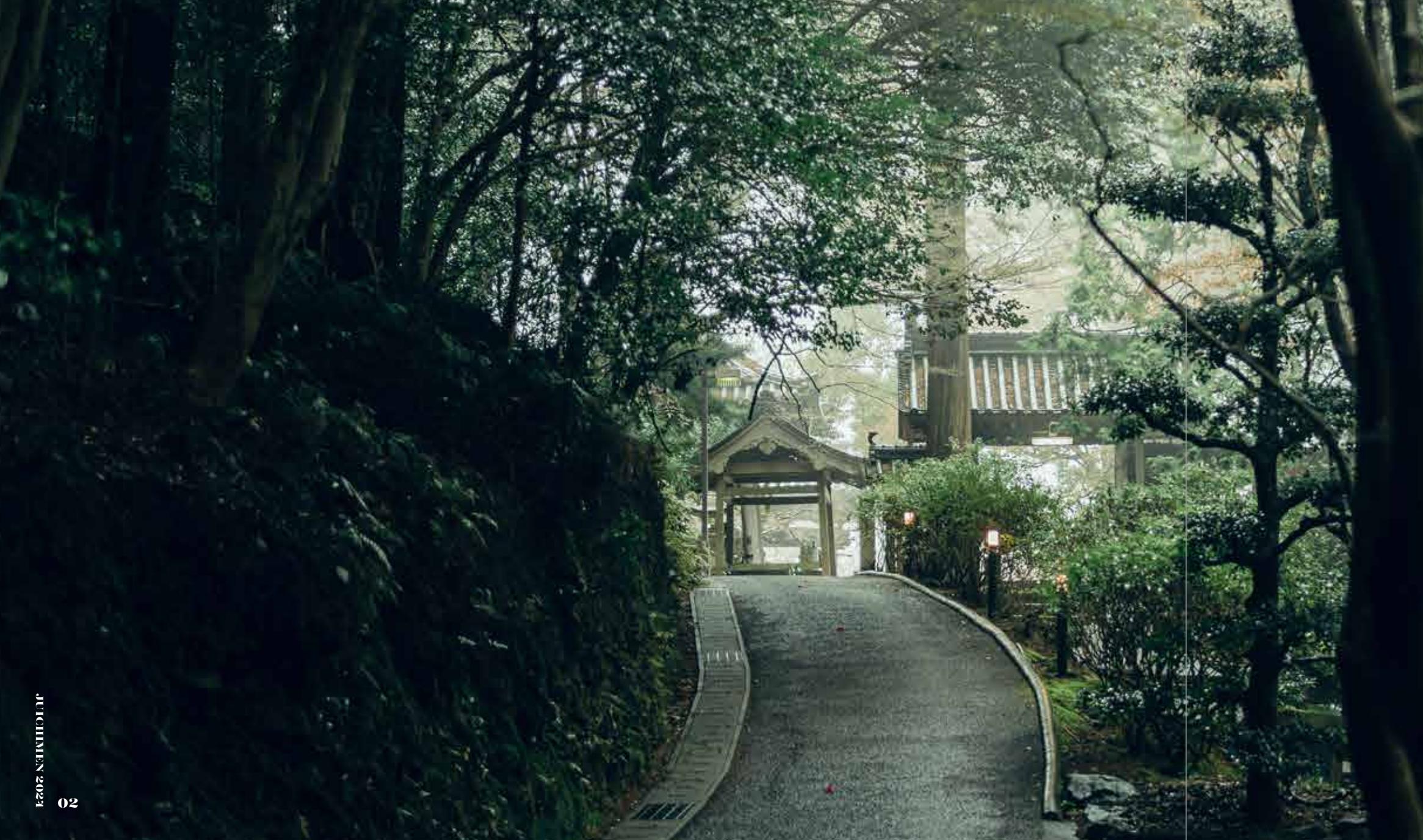
新長谷寺

藝術祭

十一面

2024
ARCHIVE

ヒラタ→ヨコハマ



扉が開く。

目の前に未知なる世界が広がっている。

目を見開く。

世界と新しい関係を繋ぐ。

人は「開く」と「見開く」を反復しながら、
世界との関わり合いを更新し続けている
と感じています。

それは、一方通行ではない、問いかけに応答
を繰り返し続けるという態度です。

本展では、三十三年が一順し再び開けた
世界において、人や街や世界にどう「新しい
関係性」を構築するかを、アートで模索
していきます。

KEIDAI



星座に見えるホクロ（あるいはタトゥー）

本作品は人間の肌に実在の星座と同じ配置で黒い点が存在する様子を撮影した写真作品である。黒い点は偶然にできたホクロなのか、意図的に刻まれたタトゥーなのか、それともそれらの混在なのか判断が難しく、星座のリテラシーがなければバラバラの点でしかない。「星の並びを動かすことができない人類が各文化圏において星座を制定していくプロセス」「歴史のボタンを掛け違えた並行世界で制定される星座の交換可能性」「星座に見えるホクロ（あるいはタトゥー）の日本の銭湯における排除の可能性」の3つの視点を相互に関係させながら、「星座」という人類史を貫いて行われた「見立て」の背景にある政治的・歴史的な「排除の構造と力学」について考察する作品群の一つ。



はくいきしろい、

stained polymethyl



ステンドグラスのように反射する作品をお楽しみいただけ
ればと思います。



松本莉央

plant lives

私はサイトスペシフィックという概念を大切にしている。大阪出身でありながら、光を求めて沖縄県立芸術大学大学院に行き、素材(紙)を求めて四国中央市にアトリエを構えるようになった。そのような、現代美術家としての姿勢を、表現したいと思っている。

牡丹文様は仏教でよく用いられる文様の一つである。そのことに着想を得て、牡丹の花をモチーフとした和紙作品を制作した。この場所が私にとっての曼荼羅空間になることを願って。



yamahara

field recording no.11

フィールド・レコーディングとは、野外の自然音を録音機器により採取することを指す。本作品は録音機器ではなく、プラスチックの円盤に物理的な傷を刻むことで音を採取した。新長谷寺の御本尊である「十一面観音菩薩」が漂着した浜辺から新長谷寺までの道筋を、円盤を引き摺りながら辿ることにより、フィールド上のテクスチャーを盤面に記録。かつて御本尊が辿った道筋が、盤面の傷と針との接触を通じ、ノイズとして再構築される。



Ryohei Kan

Ten Faces

エドガー・ルビンによるオリジナルの「ルビンの壺」の図形から抽出されたフォルムが、鏡面状に磨かれたステンレス板をくり抜いて五枚製作され、正五角形となるよう組み合わされている。図地反転图形は、ある形が周囲の空間の虚に別の形を生み出す。こうした「虚 / 実」の関係に、仏教教義「色即是空・空即是色」の「空 / 色」の連関をみるインスピレーションから本作は着想されており、周囲の風景が映り込む鏡面素材によってさらに二重の虚実の関係が創出されている。本作は木や植物が生い茂る境内の一角に設置され、周囲の環境との融和の中で十の顔が浮かび上がるのことから、新長谷寺の御本尊「十一面觀音菩薩」との関連も見出すことができる。



Photo: Ryohei Kan



perspective: self / others / bird

風景画、風景写真や、例えば実際に高所から見下ろした俯瞰の風景など、〈風景〉というものを想像した時にはこのような情景を思い浮かべると思う。

人が自分の見ている視界は現実であるということを肯定した上で、これまで得た知識によって視界を理解し、認識した時に初めて風景は存在する。

私の絵にモチーフはなく、“色や形の配置とそれ以外の空間”により構成されている。

人が風景として認識する前から存在する〈無形の風景〉を私たちが見ることは決して叶わないが、小さな要素により構成された画面は、その風景へとつながっているのではないか。私たちが個別にもつ言葉を超えた視界に映る万物のイメージが、そこに立ち現れるのではないだろうか。



大西満王
奉 般若心経

書は残していくのが基本だが、残すのではなく土に還す
ということにより、祈りを新長谷寺に染み込ませたい。
一字に祈りを込めて紙を満たし、紙が還っていくとき真に
大切なものが骨のように残っている…そうなっていれ
ば祈りが届いたと考える。



偽物の時間

サビや色落ちといった経年変化を塗料で意図的に作り出す「よごし」という塗装技法がある。あえて古さを装うことでのアリティを持たせる、いわば時代考証的役割を担う技術だ。生まれながらにして存在しない過去を与える時間的なレプリカは、そのものが発するアリティとは裏腹に、そのもの自体の時間軸を起点に時を刻まなければならない。仮に長い年月が経ち、表面を覆っていく本当の時間が偽の時間に追いついた時、レプリカはその出自に関わらずオリジナルな存在へと格上げされるのだろうか。

本作は真偽の順序を逆に、すでに経年変化したものに対して、存在しない偽の時間を経緯とは無関係に施していく。本来アリティを作り出すはずの「よごし」を、経年変化を不必要に装飾する描画材として扱うのだ。時間的なレプリカの本来の役割から解放することで、オリジナルな存在として補完可能かを逆説的に試みている。



Smells good company
便器 on the 便所

便所の役割とは、排泄する人を隠すこと。
便器は身から出たう●ちを無かったことにしてること。
質の高いインフラが整ったこの時代に生まれ、
先人たちにはとても感謝しています。

するい大人たちは皆こう言います。
臭いものには蓋をしろ

言ってはいけない、やってはいけない。
この社会の中で生きていきたいのなら静かにしてろ。
なぜ?と問うと「そう決まってるから」
スッキリできない世の中、
もしかするとその思考が一番危険だと思いませんか。

だって、便所の上に便器があってもいいじゃない。
臭いものほど蓋をあけろ。



ARTIST miu

Beautiful cell -美しき細胞-

本作品「Beautiful cell -美しき細胞-」は、木材パネルにセメントを塗り丸い穴を開け、そこに着色した樹脂を流し込んでいます。その色が偶発的に混ざり合ってゆく様子は、1つの細胞が誕生するかのような感覚で制作し「細胞をイメージした穴を集積する事でひとつの生命体」を描き出しています。

私たち人間は一つの受精卵から細胞分裂を繰り返し誕生した「奇跡の存在」である事を再認識し、「自らを愛する事」の大切さを問いかけています。

今回、新長谷寺の神聖な場に咲き誇る桜と作品を共存させる事で「生きとし生けるもの」の生命力が共鳴し、エネルギーに満ち溢れた空間が鑑賞者を包み「魂の浄化」に導くよう願い制作しました。



遠藤優斗

偽伝 新長谷寺のバグ男

あなたの目の前に人影が見えます。その姿をよく見ると、体がズレたり崩れている。あなたはその奇妙な姿を認識し恐怖ですぐに逃げ出しますか、それとも、この不思議な体験を家族や知人、SNSで共有するために写真を撮るのでしょうか？

心霊写真の多くは写真の技術的なミスや鑑賞者の心理的な錯覚によって生じています。そのような心霊写真から人々は都市伝説や近代の怪異を想像してきました。

この作品は3Dスキャンのミスで産まれた3Dモデルを用いて各自が心霊写真を撮りSNSなどで共有することで人々の間で新長谷寺に根付いた新たな怪異を作り出す試みです。各場所に設置されたQRコードを読み取りそれぞれのカメラの中で3Dモデルを設置し思い思いの心霊写真を作ってください。



Anne Grützner / Jahna Dahms
SEEN 感じる

『SEEN』では、ヤーナ・ダームスの「RELICS」とアンネ・グリュッツナーの「SPARK」の作品を寺院で展示する。寺院は、瞑想、静寂、悟りの象徴である。

『SEEN』は人生の目に見えない感覚を開かせてくれ、原理が一つになることを表現している。

「RELICS」は、金箔を施した発泡スチロールの型であり、保護するためのものであった発泡スチロールが今、過去の美しさを現している。それは人間的で数学的なことである。

「SPARK」は建物のひび割れの痕跡であり、それは偶発的なものである。痕跡を型取ったコンクリートに金箔を施することで、新しい意味を与えていた。金はあらゆる文化で神聖なもので、超越的なものを象徴し、それは人々との繋がりを生み出す。互いに関わり合い、また神聖なもの、寺院、そして訪問者とも関わり合う。

『SEEN』では、その場所、自然、神聖な寺院、そして作品の繋がりを探ることができ、目だけでなく心も開かれる。



内海篤彦

FLAME

「地域で収集した悪意のある言葉」を素材に、意図的な誤読を含む翻訳を繰り返して生成した「意味を漂白された記号」を用いた映像インсталレーション。

炎(flame)はスラングとして「罵倒」や「炎上」の意味を持つという。炎を司る護摩堂にて、この地域で放たれた悪意について考察したい。



Smells good company

Smells KONRAN hospital

想像してください。

そのグラフィックデザインから、どんな香りをイメージしますか。

そして、実際にパウチからどんな香りがしましたか。

商業デザイナーは、

「プランディングや広報活動の医者」とも言われるよう

モノやコトの価値を整理し、

魅力的に発信することを基本としています。

しかし一方で、その装飾的作業は人を欺きます。

あなたの目の前の、その得体の知れない視覚情報は、

真実ですか。





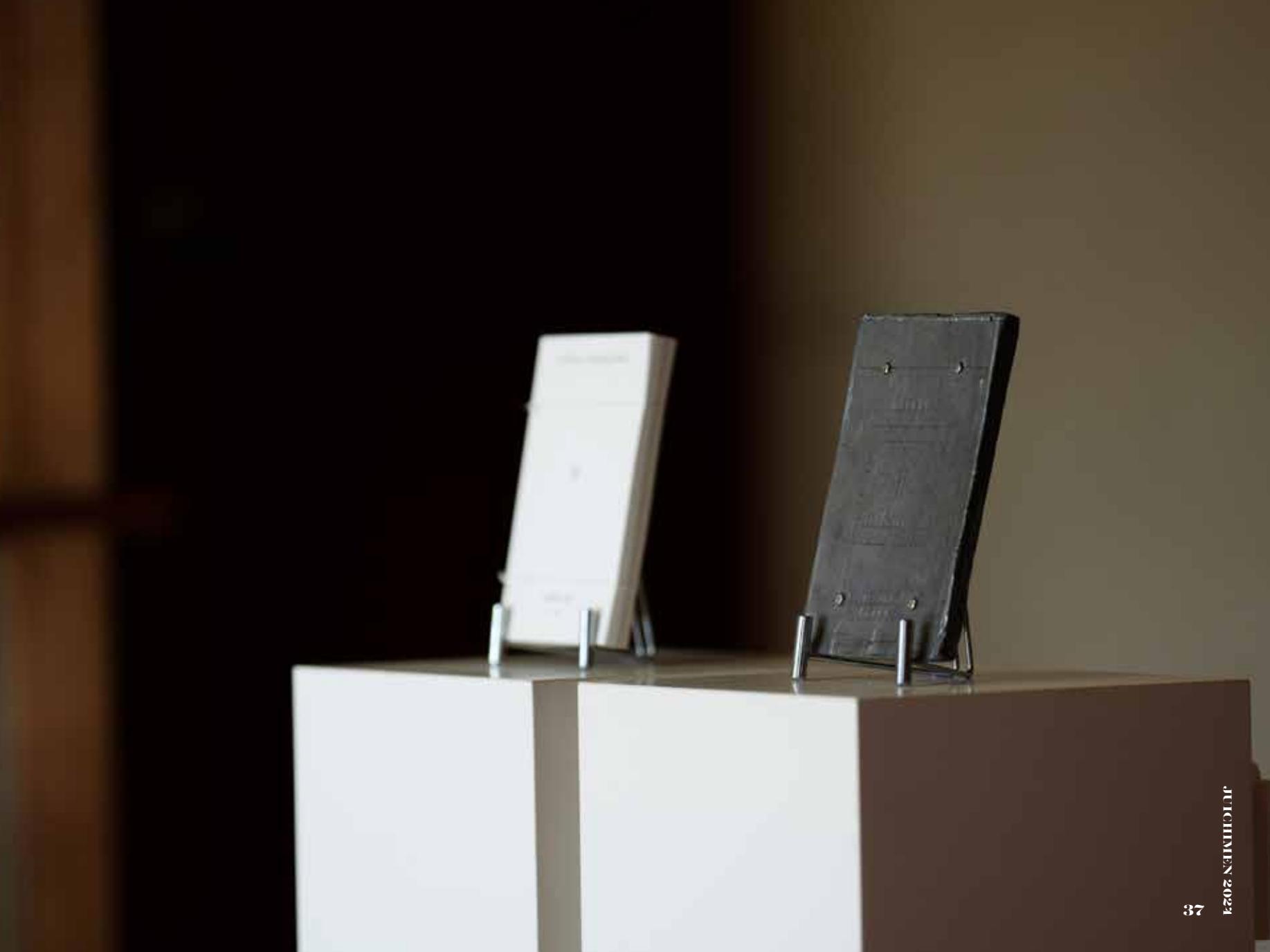
KYAKUDEN

矢原繁長

詩集封印



言語を含めた記号が、人間を、あるいは社会を、眞の意味で
「救済」したという歴史的事実はあったのだろうか。そんな
疑問のベクトルを自分自身に向けた時、時空を超越する
詩的な「何か」が生まれるのではないだろうか。その「何か」
が具体性を帯びる時刻を、私はただ待っている。



長谷川隆子
慈眼 じげん

新長谷寺の本尊である十一面觀音菩薩はあらゆる人を救済する。

菩薩像が建立された当時は現代に比べると、疫病や戦、沢山の不条理があったはずだ。救済を願う民衆の思いはとても強いものだったに違いない。

生まれてから死ぬまでの過程すべてが目に見えない存在によって見られており、因果応報の通りに祝福と苦難が用意されるとしたら、現状にも希望や自戒の念を抱く事ができるのではないだろうか。

何百年もの間、その眼差しで幾人を見詰め、導いてきたはずだが、未だに争いが絶えず、人類は愚行を繰り返している。我々現代人は仏の眼にどう映っているのだろうか。



矢野恵利子

It was easy

例えば怪我をするなど予期せぬ変化があったとき、属して
いた社会の枠組みから突然外れてしまうことがある。そし
てその枠組みは健康な成人に合わせてつくられたもの
だったと実感する。枠組みを変える努力をしてもすぐに社会
は変わらない。では当事者には何ができるのか。
本作は「今まで当たり前のようにおこなっていた事が突然
できなくなったとき」を起点とする。映像では「枠組みに戻
ろうとするもどかしさ」を表現したパフォーマンスが繰り返
される。また、スクリーンが動き続けることでその映像は
度々見切れ、鑑賞者にももどかしさを与える。当たり前の外
に立つことでみえる新たな視点を開いていく試みである。



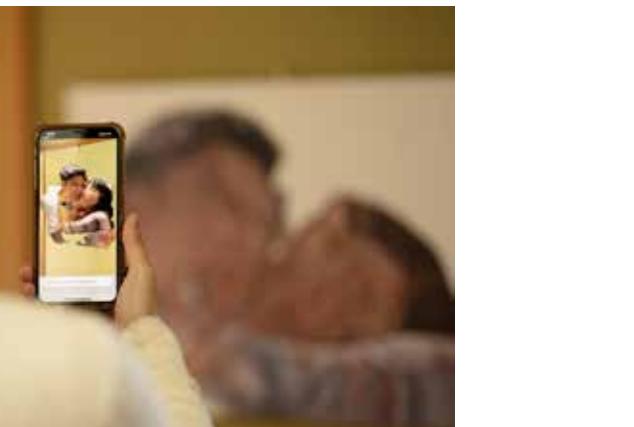
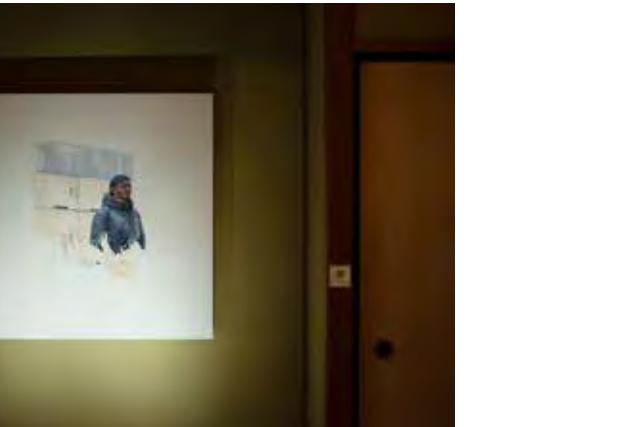
tasaki ryo

Left behind an image

現代を生きる私たちは、カメラやスマートフォンを使い、膨大な経験を積み重ね、データを脳と結びつける術を確立した。デバイスの普及により、それらを使って鑑賞行為をやだねることも多くなり、人間の新しい身体機能とさえ思うほど普及している。一方で、デバイスにおける新しい機能として3Dスキャンがある。

多くの人は「脱皮して取り残されてしまった情報」という認識にとどまっているように感じる。

私は今回の作品で、身の回りの人体を3Dスキャンし、油絵で捉え直した。この作品にスマートフォンのカメラを向けると、デバイス上で絵画の前に3Dスキャンデータが表示される。現実には存在しないものが表示される事により、獲得したはずの身体機能は働かず、デバイス越しの鑑賞が能動的に始まる。デバイスと人間の鑑賞行為を通して、私たちの身体機能の更新について探っていきたい。





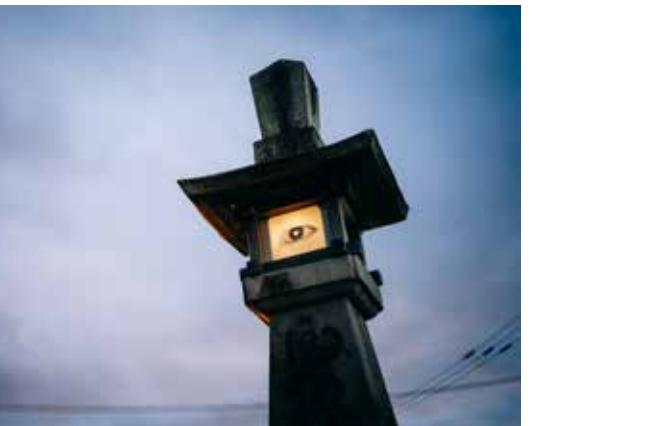
SANGAWA

Sight

人体の構造はカメラの仕組みとよく似ていて、科学的でよくできていると思ったことがあります。目は、レンズの絞り=虹彩、ピント=水晶体、イメージセンサー=網膜、脳は処理エンジンや記録装置、つまり“記憶”です。

以前のニュースで、伝統的に毎日灯し続けてきた限界集落の灯籠の灯りが、後継者不足でやむを得ず廃止したというのを見て、無関係ながら一抹の寂しさを感じたことがあります。様々な事情で失ってゆく“記憶”。

ここ黒岩海岸の灯籠も、今では明かりが灯ってはいません。カメラでは通常、光がなくては写真になりません。失っていく“記憶”に、明かりを灯しましょう。



阿南さざれ

風神雷神図半立構

在るものは変わる。環境の中で変わる。コロナ禍を経て、人々の生活や価値観は大きく変わったと感じる。そのような世界規模の出来事でも、または日常の小さな積み重なりにも、あらゆる物事は影響を受け変わっていく。変わらざるを得ないのである。“諸行無常”や“侘び寂び”が語るように、全てのものが変わっていく優しさを美と捉え慰めとしたい。この作品は、多くの人が知る風神雷神を鑑賞者の感覚を織り交ぜながら変化させていく。現状の着彩は変化の途中であり、今後も加筆していくものとする。



Nature or Nurture

資源枯渇の具体的な予測時間を契機に、従来のマテリアルの定義が拡張されていく昨今、自然素材への新たな視座が求められている。

本作Nature or Nurtureでは、本来の属性を剥奪され素材という認識の外側に置かれたオブジェクトである「流木」を、森と海、双方の時間的要因を受けた自然素材として捉え直す。この素材は森で過ごした時間を木目として刻んだ後、海洋での時間を新たなテクスチャーとしてその身に刻み直す、いわば二重構造の時間軸を持つ稀有なマテリアルなのだ。流木は、海とも陸ともいえない波打ち際に白く一列に堆積しながら独自の生態系を育んでいく。その不思議な生態系を、これまで人が自然を取り込んできたプロセスと同じ手法を用いながら、素材としての翻訳作業を行っていく。

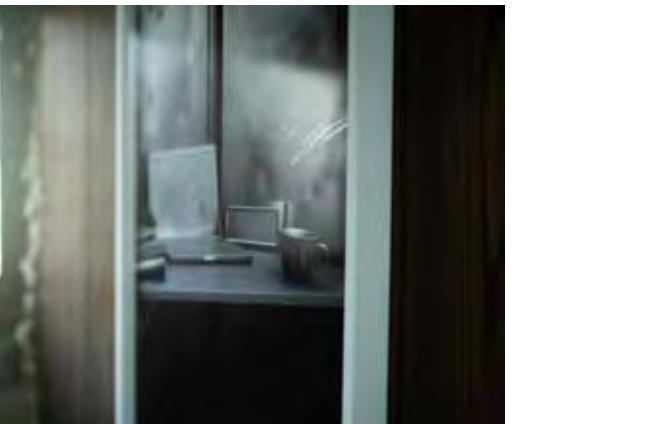


藤井智也

窓のない部屋

美術史の中でモチーフとして重要な役割を果たし、室内と外界をつなぐ媒介として存在する「窓」。窓に映る風景は時間と共に変化していく、部屋の中には明かりが灯され、そして消えていく。

本作では、窓、部屋を全て黒で塗り潰し、光の入らないブラックボックス(暗い部屋)をつくり上げる。異なる時間軸で定点撮影された窓辺の映像を、黒く塗りつぶされた同一の窓、モノに被せて投影し、それらに光(白)を与えていく。黒と白、光と影というプリミティブな次元を起点に、過去と現在の隙間に存在したであろう風景を浮かび上がらせる。



CRIE

たまたま今日生きている

たまたま今日生きている



noisy_eye

再生記憶 / regenerative memory

今作では、自身の家族とのネガティブな思い出を元にAIによって画像生成されたイメージを展示場所(かつて誰かが生活していた家屋)の写真と組み合わせることで、記憶の再編集を試みている。

自分が子どもの頃に経験したネガティブな思い出は、ChatGPTのAIによってポジティブな思い出へと変換される(ChatGPTでは『ポジティブなエネルギーを促進することが大切であると考えられている』ため、ネガティブな思いでは創作してくれないという)。そのようにして、自身が望む、望まないに関わらず“強制的”にポジティブに変換された存在しないはずの思い出は、私に起らなかつたはずの思い出への感傷と羨望を与える。それらイメージを実在する家屋と結びつけることで、記憶は切断 / 接続されていく。



長谷川隆子

夢食む ゆめはむ

伝説の靈獸「犧」。神様が、あまたのパーツをつなぎ合わせてつくった動物で、体は熊、鼻は象、目はサイ、尾は牛、足は虎になったそう。悪夢を食べてくれる事で有名だが、実は鉄や銅、武器も食べるとされる。人類の歴史は、常に「戦争」「災害」「疫病」に見舞われ続けてきた。今もパンデミックが起り、戦争がはじまり、世界は変貌していっている。犧は、平和を望む人々の願いや念が具現化したカタチであるようにわたしは思う。



Smells good company

LOVERY AKMKJ ROOM

アカメくじは高知生まれのお魚です。

天真爛漫で、元気がよく、そんなに頭はよくなくて、角度によつて目が赤く光り、やわらかで、手があります。

本当は世界中のアカメくじを独り占めしたい。

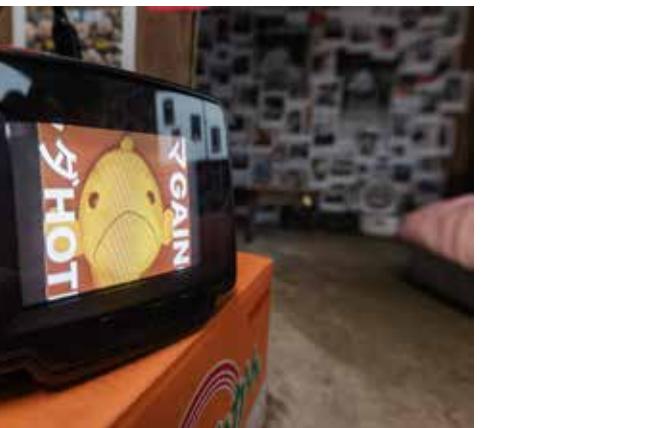
でも、アカメくじの幸せを考えると、たくさんの人に知られ愛された方がいいのです。

そして時には、複数のアカメくじを出合わせ、人間はそつと部屋から出、アカメくじだけの時間を作つてやらねばなりません。

そうすることで、アカメくじ同士の秘密の会話が生まれ、社会性が築かれるのです。

人は、アカメくじを椅子にしようとか、開きにしようとか、水に浸そうとか言います。

許されることではありません。お前を椅子にしますよ。



論

WRITTEN BY
矢原繁長 / 美術家・エッセイスト

「地方創生」…そんな言葉が生まれて久しい。ただ、多くの地方在住の人々は、本音の部分で思っているかもしれない。…「そんなことは無理だ。どうせ、行政や都会にある企業やプロデューサーに企画、運営を依頼することになるのだろう」と。

ぼくは、いわゆるコロナ禍を機に、生まれ故郷である愛媛に戻ってきたのだが、「美術作品の制作は愛媛で行って、展覧会は都会でやればいいや」という気持ちであった。そんな中、四国中央市で「新長谷寺藝術祭」が行われるという話があり、美術家として参加することになった。しかし、本当のことを言うと全くと言ってよいくらいに期待はしていなかった。失礼ながら、「芸術大学の卒業制作展程度のレベルなんだろうな」という認識だったのである。

ところが、藝術祭の参加メンバーを知り、その作品を観て、レベルの高さに驚き、自分の認識を猛省した。さらに、この藝術祭には行政も大手広告代理店も関わっていない、という事実を聞いて仰天したことを思い出す。その結果、「中途半端な気持ちで参加したら、美術家としてのぼくの存在意義がなくなる」という、いわば

プライドをかけた危機感のもとで、新長谷寺藝術祭に挑むことになったのである。

一般的に、美術作品を展示するための方法論としては、ギャラリーでの個展、美術館での企画展、国内あるいは世界規模でのアートフェアなどがあるのだが。それらの違いや新長谷寺藝術祭のクオリティーの高さについて、ぼくが執筆担当する愛媛新聞文化欄・四季録(2024年9月15日掲載分)の「美術エッセイ」に書いたので、以下、その文章を引用する。

ある画廊で、「私は絵を観るのは好きなのですが、買う気はないです」ときっぱり言い切る人に会った。うなぎの蒲焼きを焼く店の傍らで、その匂いだけをおかげにして白米を食べる、という落語を思い出す。

日本人が「美術品は見るものであって、購入の対象ではない」と思い始めたのは、各地に美術館が建設されてからのようなである。その結果、美術品は「見るだけのもの」と考える人が増えたらしい。昔、「バスキア」というアメリカ

映画を観ている時、「プロなら金を取れ」というセリフに参加した。参加後、会場の構成と各作品のすばらしさに(ここでも)ビビった。また、その主催者とプロデューサーが、(大企業でもなく行政でもない)四国中央市出身、在住の若いクリエーターたち、という事実を知つてさらに唸つた。

「この藝術祭はすばらしい。正直言って、実際に作品を観るまではナメてました。いやー、実に素晴らしい…」目利きのベテラン画廊主の言葉が、数々の出品作のクオリティーの高さを示している。

ための値段交渉が、そこかしこでなされているのがアートフェアである。アートフェアとは、数十のギャラリーが集まって、各ギャラリーは「イチオシ作家の作品を売ろう」という明確な意図をもって開催される。海外のフェアになれば、100を超える出展ギャラリーが並ぶ。まるでバブル期の証券取引所のような、一種の殺氣さえ漂う空気感。昔、ぼくはアート台北に行った経験があるので、図らずも、その熱気に気圧された。「こんなことで、ビビっているから日本人は世界で勝てない」という、妙な気持ちが心の中に芽生えていたように思う。

そんな二極化する美術のあり方に異を唱えるように登場したのが、地域藝術祭である。その主たる目的は、地域の伝統や文化、あるいは景観の中に現代美術作品を展示し、多様な人々の交流を促して地域を活性化させることにある。ただ、多くの藝術祭の実質的な主催者が大企業であったり、行政であったりする場合も結構あり、その場合の運営方法は美術館と何ら変わらない。

今春、ぼくは何となく、なりゆきで新長谷寺藝術祭に参加した。参加後、会場の構成と各作品のすばらしさに(ここでも)ビビった。また、その主催者とプロデューサーが、(大企業でもなく行政でもない)四国中央市出身、在住の若いクリエーターたち、という事実を知つてさらに唸つた。

それとは逆に、人でごった返し、現代美術作品購入の

来年、第3回新長谷寺藝術祭を予定しているとの情報を得た。

新長谷寺藝術祭には、多くのボランティアが協力をしてくれたのだが、そこで希望に満ちた光景を目撃した。その出来事を書いて、この文章を締め括りたいと思う。

ボランティアで参加していた男子中学生がいた。初日の彼は、運営スタッフから言われたことはこなすものの、その表情には美術への関心や楽しさといったようなものは全くなかった。ぼくが「君は絵を描くの?」と尋ねても「はい」と小さく答えるのみ。きっと、学校の教師から「ボランティアをやるべき」と言われ、しぶしぶ従っているのだろう、とぼくは思っていた。

ところが数日後、彼は他の高校生ボラティアと和気あいあいと冗談を言い合い、来場者に対しても、笑顔で「こんにちは」とパンフレットを配っている。「この数日、彼の心に何が起きたのだろうか」…そんな思いの中、最終日がやってきた。グッズ売り場に立ち寄った中学生の彼は、「これと、これと、これ」とオブジェ、バッジ、ステッカーなどを買っていく。気をつかった販売担当スタッフが「そんなに買って大丈夫? ご両親に叱られない?」と声をかけると、財布からくしゃくしゃの1万円札を出しながら、彼は快活に応じる。…「大丈夫です。このお金は、ぼくが貯めたお小遣いなので」と。

2600円のお釣りを受け取る彼の背中を見ながらぼくは思った。…「ありがとう。君は最高にカッコ良いよ」。桜が静かに宙を舞っていた。2024年・春。



論

WRITTEN BY
長尾龍明 / 新長谷寺副住職

2024年3月22日～31日までの10日間、当山の境内、または旧境内地を舞台に多くの作家さんや支援協賛を頂いた方々、檀信徒の皆様の協力のもと素晴らしい展示企画が行われたこと誠に嬉しく思っております。実際に当山でイベントを行うのは2019年の寺フェス以来4回目、芸術祭だけでも2回目となり、回を追うごとに様々な方の協力や、芸術祭を軸にした縁の広がりが大きくなっていることに驚かされるばかりです。まずは、この芸術祭に関わったすべての方に感謝の言葉を述べたいと思います。ご協力ありがとうございました。

以前より「お寺でイベントをやることの難しさ」についてよく考えていました。これは2019年に寺フェスを行ってから一貫してお伝えしたことですが、寺社と芸術文化には、歴史的な深い繋がりがあります。例えば、この新長谷寺の元になった奈良の長谷寺においても、紀貫之の和歌や、小林一茶の俳句、物語では、紫式部の『源氏物語(玉鬘)』、菅原孝標女の『更級日記』、藤原道綱母の『蜻蛉日記』などの舞台となり、当地に於いて詠まれた歌が刻まれた歌碑も点在しています。舞や歌を仏前や神前で奉納する儀礼も多く残っております。つまり歴史

に照らし合わせてみればなんら革新的なことでもなければ、伝統を破壊するようなものではありません。1300年以上前からずっと行われてきたことです。文化サロンとしての寺社という側面は歴史的事実です。

ただし、そこには、今以上に切実な神仏に対する祈りと信仰がありました。そして、現在の新長谷寺が存在するのも崇敬護持されてきた僧侶、檀信徒の方々がいたからこそです。いわば我々以前の多くの方々の想いや協力によって成り立っているものに乗っかっているわけです。その上で考えなければならない事は、現在に至るまで懸命に引き継がれてきた“信仰の場としての聖性や伝統”を守ることでした。より具体的に言えば、この芸術祭を執り行う場は、ただの展示場所でもなければ、美術館でもありません。人々が様々な願いや救いを求めて訪れる靈場です。今を生きる信仰の場です。そういうわけで、ここが“お寺であることの意味を考えてほしい”という思いがまず第一にありました。

しかしながら、それは一方でとても悩ましいことでもありました。と言うのも、あまりにも制約を強める事で作家さん本来の良さや表現を萎縮させてしまう、抑圧する事でもあったからです。信仰と表現の自由、聖と俗のバランスで悩むことがありました。例えば、作品の中には屋外での展示が難しいものもあり、お堂で展示をさせてほしいという嘆願もありました。お堂の中には様々なルールがあります。そもそもそこは神仏の住する聖地の極限であり、どうしても譲れない部分でもありました。

そんな時に転機が訪れました。ある朝のお勤め中に

不意になんとなく実行委員のメンバー総出で拝んでいるイメージが浮かんだのです。始めは、なんでこんな雑念が…と自嘲気味に感じたりもしましたが、よくよく考えてみると、そのお堂の本尊さんに帰依してもらう良い機会なのではないか?と思い至り、作家さんにお勤めして頂いて、神仏への祈りを捧げてもらい、その上で調整展示してもらうことになりました。「方便を究竟と為す」という言葉が大日経というお経に載っています。これは菩提心(悟りを求める心)大悲心(他者を慈しみ救おうとする心)を前提として様々な方便を用いて悟りの世界へ通達するという意味であり、真言宗の教学上重要な文句として度々引用されます。これを根拠として、展示物を祈りの一部とする方便をもって解釈することで正当化をはかりました。しかしこれは荒唐無稽な物ではありません。第一に作家の皆さんには私と共に祈りを捧げて頂きました。(菩提心)そこには皆さん自身に、人を楽しませたい、喜んでもらいたい、という根源的な利他性(大悲心)を少なからず帯びていたはずです。また展示を通じて新たに神仏とご縁を結ばれる方も多くおられたことが、芸術という方便を用いて究竟にならしめたと言えるのではないでしょうか。

会期中、老若男女問わず多くの方が訪れ、想い想いに、作品に対する感想を述べたり、楽しんでおられる姿を見ました。特に興味深かったのは、ガイドさんが作家本人とは知らずに作品について批評が始まるこもありました。「ここは青のほうがいい」「これはどうやってるの!?」「どういうこと? わからん笑」。そこでガイドさんの

解説が入ることもあれば、感じたままの印象で帰って頂くこともあり、数多くの展示や美術館あれども、このようなコミュニケーションが生まれるのは、この芸術祭にしかない魅力の一つではないかと思いました。展示の内容についても入門から学術的なレベルに至るまで幅広さがあり、昨年と比較すると少し難しくなったかなという印象も個人的になりましたが、リピーターとなって何度も訪れる方の姿を見て学びもありました。何よりも見る人、見られる人、双方の働きがあって語りが生まれる空間は、まさしく境内一体が両部曼荼羅となっていたようにさえ思います。

奇しくも、今年は33年ぶりの本尊ご開帳の年でもありました。思えば昨年から不思議と長谷觀音の導きによって盛大にお祝いすることができたのだと確信いたるものがあります。昨年の10月には関東より学芸員さんの調査が入り、今まで明らかになっていた新長谷寺と寒川の歴史を掘り起こすことになりました。また2月には私自身が奈良の長谷寺に赴き、10mを超す天下無双の大靈像である長谷觀音を拝することが叶いました。そもそも代表の将太さんが言い出さなければ…田渡さんのディレクションがなければ…あげるとキリがありませんが、誰一人かけてもこの芸術祭は成立しなかったと思います。また、何よりも昨今の戦争や災害、疫病による混沌とした世界をみれば、我々にとって当たり前の平和と日常が如何にありがたいかを思い知るばかりです。願わくば、この祭事が続き、世界を開くこと、見開くことを通して多くの方に神仏のご加護がありますように。

合掌



※芸術祭開催以前、お寺で開催されていた音楽イベント

ARTIST miu
現代美術作家。1975年生まれ。姫路市出身。四国中央市在住。宝塚造形芸術大学芸術学部絵画コース卒。具体美術協会の鷲本昭三に師事し、「今までないものをつくれ」という具体的精神を学び、在学中にセメントを用いた作風を確立する。無機質なセメントに生命力溢れる彩りを与え「希望を呼び醒ます」をコンセプトに作品化している。アジア、ヨーロッパなど国内外で活動している。

阿南さざれ
1989年、福岡県生まれ。現在、東京を拠点に制作活動中。大学にてデザインを学び、卒業後にアート作品の制作に挑む。あらゆる物事が変化の途中にあるという諸行無常観を基に、完成しない作品を制作している。

Anne Grützner
1987年、ドイツ、ドレスデン生まれ。東京在住。ドレスデン芸術大学と多摩美術大学で美術を学ぶ。日常生活と宗教性を織り交ぜながら、欠点、不完全さ、不確かさを探求する。日本のデザインと美術を融合させ、日本のマインドフルネスの概念とヨーロッパの影響を受けたアートの理解を融合させた作品を展開。日本での学びによって自身のアートに影響を受け、2015年に東京に移り住み、現在に至る。

Jahna Dahms
1972年、ドイツ、コットブス生まれ。ドレスデン在住。異なる時代や文化を融合させた普遍的な形式言語を探求する。作品は過去へのオマージュであり、芸術が普遍的なものであることを示す。ドレスデン工科大学で美術史、歴史学、先史学、哲学を、その後ドレスデン美術大学で美術を学ぶ。ドレスデン美術大学の修士課程を修了後、ドレスデン応用科学大学芸術学部長に就任。芸術の定義に取り組む。

内海篤彥
「見立て」や「平行世界」を発想の起点とし、脈絡のない複数の文脈をコラージュすることで見過ごされてきた何かを顕在化させることに興味があります。アートとデザインを横断する作品制作、教育活動を取り組んでいます。
15th SNDC三澤賞。

遠藤優斗
1993年愛媛県生まれ。広島市立大学大学院芸術学研究科造形芸術専攻修了。自然物の持つ固有の立体的な造形、機械的な模倣や複製に興味を持ち制作をしている。

大西満王
1999年四国中央市生まれ。書道を通じて紙が好きになりました。現在は、四国中央市新宮町で紙漉きをしています。

Ryohei Kan
美術作家。1983年愛媛県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了、博士号(美術)を取得。「空虚(Void)」をめぐる思考をもとに、多様なメディアを横断的に扱いながら作品制作に取り組み国内外で発表する。広島市立大学講師、SLAP総合ディレクター。

CRIE

カメラマン。元グラフィックデザイナー。四国中央市生まれ、四国中央市在住。写真歴は18年以上。写真を、ただ消費されスマホの中へいちデータとして埋もれる記録にしてしまうのではなく、いつまでも個人の記憶(人生)に残るような、かけがえのない一瞬として記録するカメラマンになりたいと2022年に独立。主に四国を中心に出張撮影をしています。東京、横浜、神戸での写真展示経験あり。受賞歴は富士フィルム、東京カメラ部等。

Juno Mizobuchi
1992年香川県生まれ。京都精華大学卒業。主に絵画作品を作る。展示、アートワークの提供、壁画の制作などをを行う。イメージの風景をモノへと平面上で物質化させる。各個人が持つ世界の見方を再認識することで、自分という存在を感じられる作品を制作する。現在は香川を拠点に活動。

Smells good company
1990年生まれ、四国中央市在住のグラフィックデザイナー2名による秘密結社。「嗅覚にまで響くデザイン」をミッションと活動する。2024年6月、本格始動開始。本展中はまだ胎児の状態です。

tasaki ryo
1992年生まれ、武蔵野美術大学卒業。3Dスキャンと鑑賞という行為について思考し、フィジカルとデジタルの行き来に鑑賞者が受け取った実態はどこにあるのか、スキャンデータによる新しい知覚から獲得された鑑賞方法を探っている。

tado
1990年生まれ。武蔵野美術大学卒業。本芸術祭ディレクター。物質を取り巻く環境や性質を多角的に観察、実験、応用することで、「もの」にまつわる新たなシナリオや機能の掘り起しを模索している。実験的デザインコレクティブMULTISTANDARDメンバー。

noisy_eye

美術家。1987年香川県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科陶磁コース卒業。普遍的に思える日常生活の中で変化していく人々の心の機微に关心を持ち、極めて個人的な問題のために見落とされ、当事者の中で積もり積もっていく小さな事象やストレスをユーモアに変える作品を手がけている。

TALK EVENT

「十一面野良ばなし」のアーカイブは
公式インスタグラムからご覧いただけます

はくい・きしろい、
作品の購入者または鑑賞者が作品の好きなところを“カット”し、ステッカーとして身近な物に“貼る”という行為を作家・鑑賞者との間で行う、双方向的な作品を制作しています。

長谷川隆子

切り絵作家。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。香川大学非常勤講師。芸術士®。自身の帰郷を機に、四国各地に伝わる和紙の文化と出会う。その滑らかさや美しさに魅了され、「切り絵」の手法を用いた美術作品と照明による空間全体を使つたインスタレーションを開催。四国中央市出身、香川県在住。

藤井智也

美術家。1984年香川県生まれ。ヘリット・リートフェルト・アカデミー(オランダ)で写真を学ぶ。現代社会に氾濫するイメージ、物質との関係性を起点に、立体や映像で再構築を行い、作品を生成している。主な展覧会に、「亡靈のジレンマ」(229 GALLERY、東京、2023)、「Goodbye, then Hello」(ホテル アンテルーム 京都、京都、2022)など、香川県高松市にあるアーティストランスペース「Syndicate」にて企画、運営としても活動している。

tado

1990年生まれ。武蔵野美術大学卒業。本芸術祭ディレクター。物質を取り巻く環境や性質を多角的に観察、実験、応用することで、「もの」にまつわる新たなシナリオや機能の掘り起しを模索している。実験的

矢野恵利子

美術作家。1987年香川県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科陶磁コース卒業。普遍的に思える日常生活の中で変化していく人々の心の機微に关心を持ち、極めて個人的な問題のために見落とされ、当事者の中で積もり積もっていく小さな事象やストレスをユーモアに変える作品を手がけている。

TALK EVENT

「十一面野良ばなし」のアーカイブは
公式インスタグラムからご覧いただけます

矢原繁長
1960年愛媛県生まれ。現代美術家・詩人・エッセイスト。関西大学法学院卒業。私の興味は常に言語と物質の関係性にある。過去も現在も、おそらく未来も、その関係性を表現していくことになる。そんな気がしている。

yamahara

ノイズアーティスト、DJ。1998年愛媛県生まれ。ゴルジェやシンゲリなどのディープ・アンダーグラウンドなダンスマジックを祝賀的にミックスしたかと思えば、SNS時代へヴィバーウェイヴ以降のマナーで、渋谷系・シティポップもプレイする、ポップ

とノイズの解体的交感を実践している。

松本莉央

現代美術家、紙アクセサリー作家。沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科修了。現在、愛媛県四国中央市在住。私は木彫作品を作り、紙を切って折る。美術家にとって木を削り、紙を折るという手業は、刹那に「祈り」を重ねていく行為であると思う。

森下拓紀

1990年生まれ。四国中央市出身のフォトグラファー。名古屋造形大学先端表現コース映像/アニメーションクラス卒業。大学の授業で写真の楽しさを知り、そこから写真に没頭。撮影スタジオなどに勤務し、商業写真や広告写真を学ぶ。カメラの仕組みや撮影にまつわる「覗く」という行為などをテーマとした作品を中心に制作を行なう。

はくい・きしろい、
作品の購入者または鑑賞者が作品の好きなところを“カット”し、ステッカーとして身近な物に“貼る”という行為を作家・鑑賞者との間で行う、双方向的な作品を制作しています。

長谷川隆子

切り絵作家。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。香川大学非常勤講師。芸術士®。自身の帰郷を機に、四国各地に伝わる和紙の文化と出会う。その滑らかさや美しさに魅了され、「切り絵」の手法を用いた美術作品と照明による空間全体を使つたインスタレーションを開催。四国中央市出身、香川県在住。

藤井智也

美術家。1984年香川県生まれ。ヘリット・リートフェルト・アカデミー(オランダ)で写真を学ぶ。現代社会に氾濫するイメージ、物質との関係性を起点に、立体や映像で再構築を行い、作品を生成している。主な展覧会に、「亡靈のジレンマ」(229 GALLERY、東京、2023)、「Goodbye, then Hello」(ホテル アンテルーム 京都、京都、2022)など、香川県高松市にあるアーティストランスペース「Syndicate」にて企画、運営としても活動している。

tado

1990年生まれ。武蔵野美術大学卒業。本芸術祭ディレクター。物質を取り巻く環境や性質を多角的に観察、実験、応用することで、「もの」にまつわる新たなシナリオや機能の掘り起しを模索している。実験的

矢野恵利子

美術作家。1987年香川県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科陶磁コース卒業。普遍的に思える日常生活の中で変化していく人々の心の機微に关心を持ち、極めて個人的な問題のために見落とされ、当事者の中で積もり積もっていく小さな事象やストレスをユーモアに変える作品を手がけている。

TALK EVENT

「十一面野良ばなし」のアーカイブは
公式インスタグラムからご覧いただけます





主催: 十一面実行委員会

Producer__ Takahashi Shota (Smells good company)

Director__ Tado Daiki (panorama)

Director__ Utsumi Atsuhiro

Art director / Designer__ Takahashi Yuzumi (Smells good company)

Photographer__ CRIE

Donatello__ Morishita Hiroki

PERIOD 会期

2024.3.22[FRI] -31[SUN] 10:00-17:00

22(金), 23(土), 24(日), 29(金), 30(土)は20:00まで夜間ライトアップ / 最終日は15:00まで

VENUES 会場

新長谷寺(愛媛県四国中央市寒川町3214)と周辺地域

SPONSOR 協賛

(株)サニープレイス

(株)藤田組 / Smells good company

(有)エース工芸社 / 三和紙工(株) / cafe stand Billy / 行政書士法人やまびこ gekokujo / 司法書士法人やまびこ / 新長谷寺 / 高橋禮子 / (株)鍋ゴム / (株)橋本商店

(株)富士印刷 / プラス受川 / PEKO design associates / (株)バステム

(株)保険パートナーみらい / (有)マルミヤ / (株)マルヤマ特殊伐採 / 焼肉 風来坊

(有)青木かまぼこ店 / クック・パパ / 協和紙工(株) / (有)小城印刷 / KSコピー印刷(株) / (株)さいとう建築

サタワク寒川教室 / サンヨー食品 / 大黒工業(株) / 田渡正史 / (株)豊岡製作所 / マルショウ(株)

(株)愛和架設 / 出雲大社土居教会 / 大西茶園 / Syndicate / 達磨電機工業(株) / 中央印刷システム / 美容室icoi

ふじえだファミリークリニック / (有)ふじやクリーニング店 / (株)フレンド / 守谷祐輔 / レゴリストラスONE(株) / (株)sovie

SUPPORT 後援

愛媛県 / 愛媛県文化振興財団 / 愛媛美術教育連盟 / 愛媛新聞社 / あいテレビ

愛媛朝日テレビ / 南海放送 / テレビ愛媛 / 愛媛CATV / FM愛媛 / タウン情報まつやま

